

# 梅田川水辺の楽校新聞

### 杉沢上堰を利用する農業者の方々にお話をうかがいました

梅田川と杉沢上堰に大変深いかかわりを持ちながら生活されてこられた方々に昔の堰や梅田川について貴重なお話を伺いましたのでご報告いたします。

#### 「昔の川や堰との関わりの様子をお聞かせください」

昔は上流に田んぼが多かったので、日照りの多い年は下流にまで水が来ないこともあった。逆に、河川改修されるまでは洪水で田んぼがよく水につかって苦労した。昔の梅田川沿いは竹(川竹)が多くあって、この竹を利用して川底に敷き、その上に土のうを積んでつくった。だから大水でよく流されたもんだ。

堰を使って水田を行っていた農家は、12,13軒ほどだった。杉沢上堰下流には、円城防堰(えんじょうぼうせき)、五郎堰があった。

洪水のとき組合総出で堰板をはずしていたもんだが、今は利用者が一軒だけになったので、なんとか家族でやっている。毎年4月上旬に堰普請(せきぶしん; 堰の整備や修理のこと)を行い、5月に田んぼに水を入れ、8月下旬に落とす。

田んぼへつながっている山裾の水路は20年前もU字溝だったんだが、4月下旬に水路のドブさいりをやると、マムシがよくいたし、たぶん今もまだいると思う。

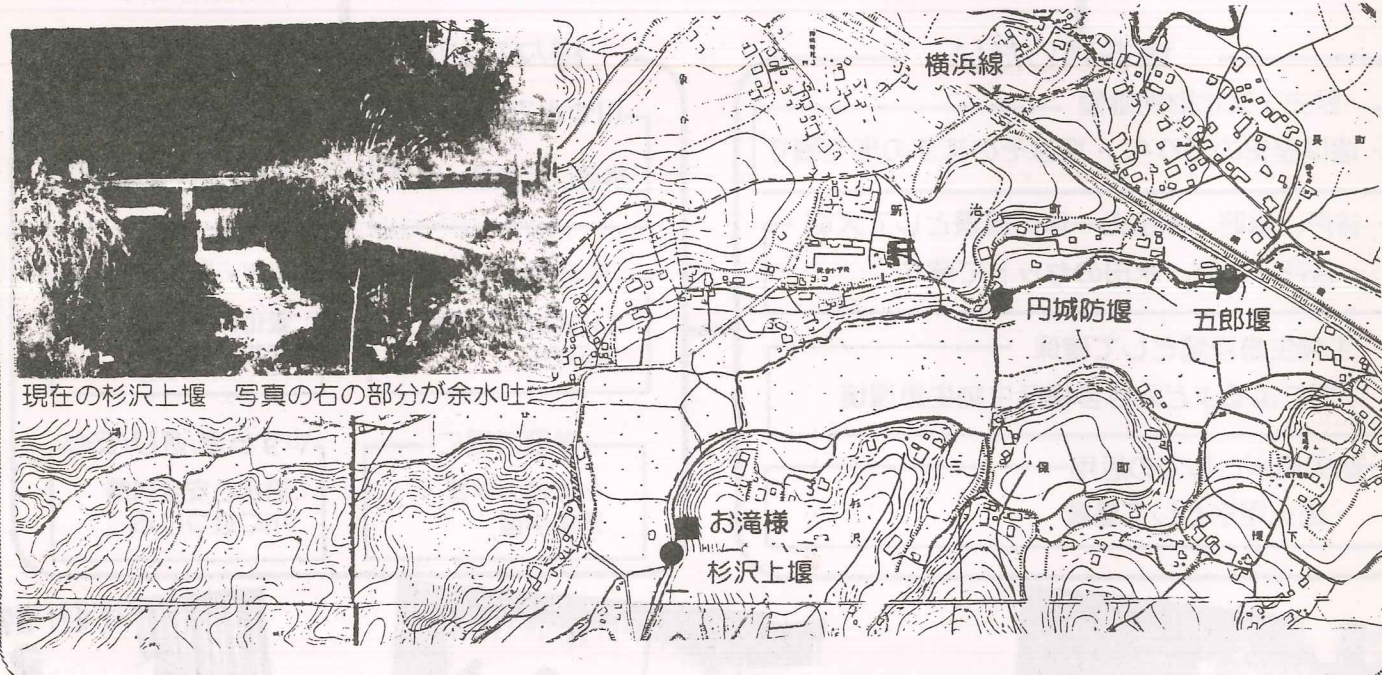
#### 「杉沢上堰はいつ頃作られたのですか?」

今の堰がコンクリート製になったのは昭和8年頃で、当時梅田川では一番立派な堰だったと思うよ。隣にある余水吐(左下写真の右側:洪水時、堰の負担を軽くするために設けたもの)は30年頃に後から作られたものだ。

#### 「ところで、ワークショップで話題になった「お滝様」についてですが…」

よく分からないんだけど、明治の頃かそれ以前のことだろうと思うんだが。もしかしたら、杉崎秋蔵さんのおばあちゃんか杉崎義美さんなら知っているかもしれない。

〇話し手  
(杉沢堰利用組合の皆様)  
岩沢 秀夫さん 岩沢 登さん 杉崎 丈二さん  
〇聞き手  
(横浜市下水道局河川部) 松山・柳・宮本  
(㈱ニテア) 大澤 1998.01.27



### 川づくりワークショップ Q&A ~ワークショップにかかわる質問にお答えいたします~

Q.「水辺の楽校プロジェクト」について教えてください。

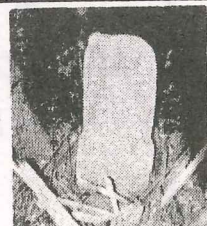
A.「水辺の楽校プロジェクト」は、建設省が平成8年度に創設したモデル事業の一つであり、地域の方々や学校関係者との連携を図り、河川等の水辺を子供たちの遊び場や自然体験の場として役立てていくことを目的としています。

Q.10年に1度の洪水の確率というだけで堰を残さないのは良くないと思うのですが、堰を残した場合の検討は行っているのでしょうか?

A.堰は水田に引水するための施設です。堰の機能を残す方法はいろいろあります。一般的な方法は転倒堰をつくって電動ポンプで水を送るやり方です。この場合、河川法では整備後15年間分のポンプの電気代を補償します。

### 班日誌

杉沢上堰の側の林に「お滝様」と呼ばれる古い石碑があります(右の写真)。今のところその由来が掴めていません。どうやら大分昔のことらしいのですが、知っている方は編集部までご一報を!

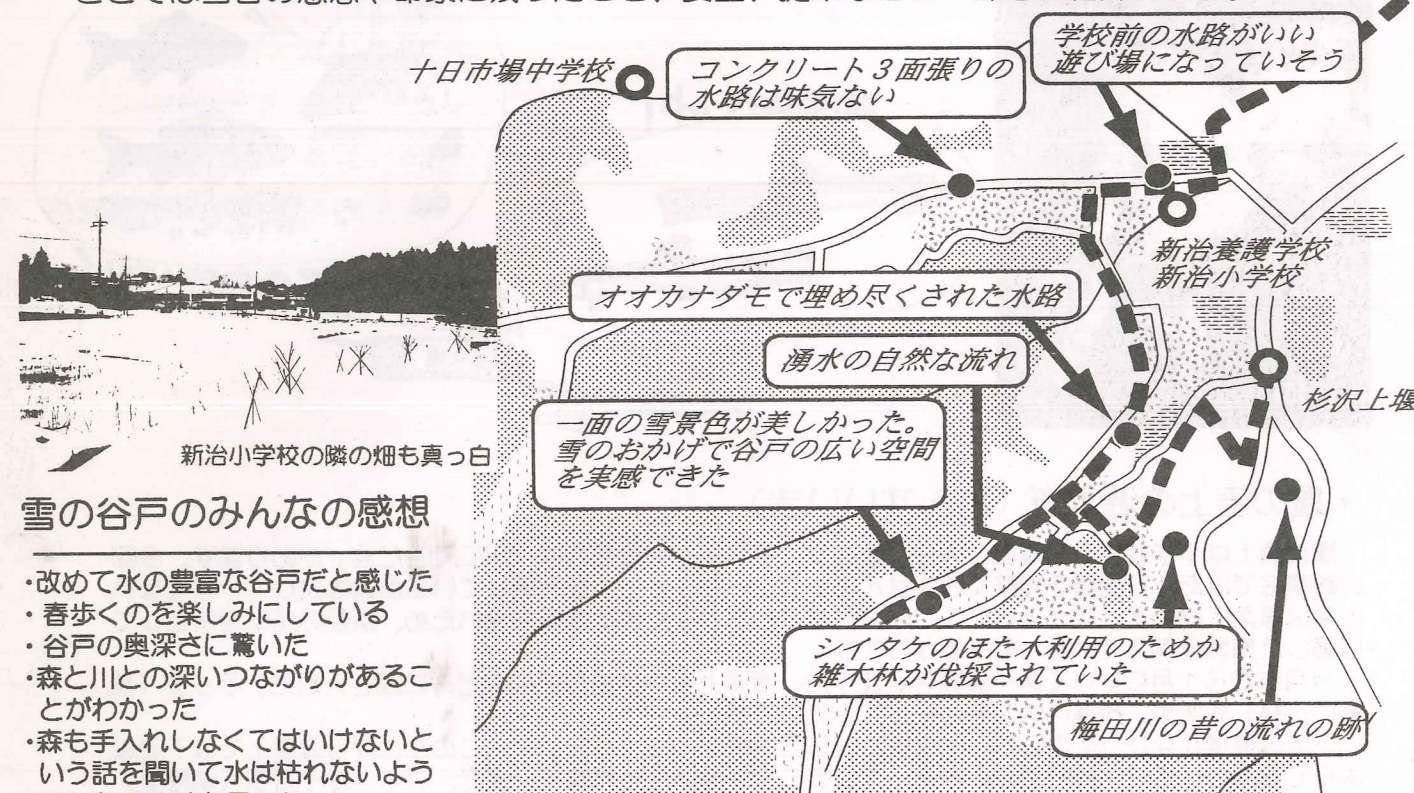


「先日群馬県へイワナの調査に出かけ、久しぶりに雪渓に残された熊の足跡を目撃しました。」(酒巻)

閑森です。魚、不思議な形です。こーと見ると何だかうろこ目がぐるぐるになりませんか。

### 雪の谷戸歩きになりました!

1月17日(土)に梅田川・川づくりワークショップの3回目が行われました。2日前の大雪のため、三保・新治の谷戸や森も一面銀世界となり、谷戸の奥深くまで踏み入ることはできませんでした。谷戸歩きでは「梅田川を楽しむ会」の原口さんから周辺の里山などのお話を伺うなど、参加者の谷戸に対する関心は一段と高まってきたようです。ここでは当日の感想や印象に残ったこと、要望、提案などの一部をご紹介します。



#### 雪の谷戸のみんなの感想

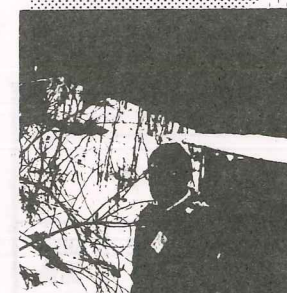
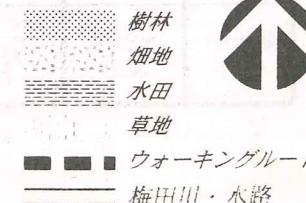
- 改めて水の豊富な谷戸だと感じた
- 春歩くの楽しみにしている
- 谷戸の奥深さに驚いた
- 森と川との深いつながりがあることがわかった
- 森も手入れしなくてはいけないという話を聞いて水は枯れないようにしなくてはと思った
- 谷戸の原風景がそのまま現存しており、昔の日本の原風景がしのばれて良かった
- たんぼをやめて畑にする農家が増えている。そのせいでホテルが減っている

#### 「梅田川を楽しむ会」原口さんのお話

梅田川の上流には約10の谷戸があり、まだまだきれいな水が流れています。コナラやクヌギを伐採することで、日当たりが良くなり、植生にも変化が見られるようになります。また、伐採された木材は、シイタケの栽培に利用されているなど、里山の管理と人の生活のサイクルが今も保たれています。

#### こんな要望や提案も

- ゴミが多かった。ゴミ拾いの計画があれば参加したい。
- 環境学習の場としても利用できるようにしたい
- 雪のない時にもっと谷戸の奥までいきたい



谷戸の話をしてくれた原口さん



雪のあぜ道を渡りました



## 杉沢上堰と水生生物（その2） ～冬の杉沢上堰と魚類のかかわり～

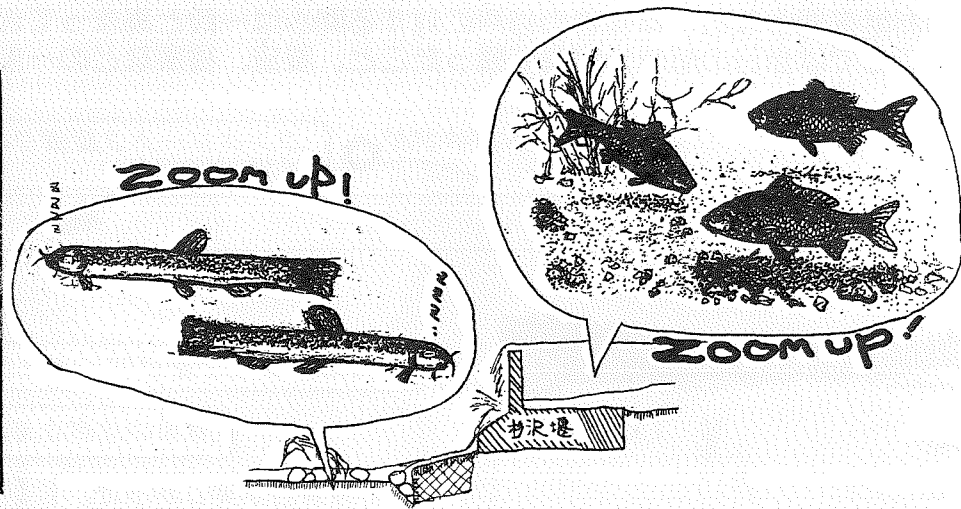
文：酒巻 一修（ホテル班）  
松林 健一（W.S.事務局）  
イラスト：関森 幸恵（かわせみ班）

### 堰の周辺で魚類はどう生活しているのか

前報では、既にいくつかの調査によって梅田川では10種類強の淡水魚の生息が報告されていること、そして1月におこなった観察会では、冬にも拘わらず杉沢上堰周辺でその内の8種類の生息が確認できたことを述べました。今回はその結果を踏まえて、堰と魚類の生活との関係について少し詳しく考えてみることにしました。

#### ・新治小学校の瀬とよどみ

川床は砂泥か岩盤で、流れのある瀬の部分ではまったく魚影が見られませんでした。他方、水際には流れが当たってできた深みがいくつもあり、川岸の草が水に垂れ込んでいました。ほとんどの魚はこのような川岸の茂みや石の下等で見つかることができました。（左下の写真）



#### ・堰の直上の湛水域（たんすいいき）

堰の直上は小学校付近の環境と大きく異なり、湛水域という言葉は「川にできた池」があります。今回の観察会ではあまり魚類を観察できませんでした。しかし、ここを利用している魚類は決して少なくないと私は考えています。なぜなら、ここは流れがほとんどなくまた水深も深いため、魚類の越冬場所としては適した環境を備えていると思えるからです。

11月末から1月にかけてある実験をしました。堰直上と小学校付近のよどみに餌を入れたトラップ（魚籠の一種）を沈め、捕獲の状況を比較してみたのです。

下流は捕獲がなかったのに対し、堰直上は毎回捕獲が確認されました。このことから堰直上では下流域よりも冬期としては比較的活発に摂餌していることがうかがわれます。また、コイ・オイカワ（幼稚魚）は堰直上だけで確認されました。おそらくたっぶりある深みはコイ等の大型魚には安定した休み場を、また流れが緩く水草が繁茂する深みは幼稚魚に安全な越冬場を提供しているのだろうと考えられます。

堰の周辺で行った魚類調査の結果（作成：酒巻）

調査場所	魚の主な生息場所	正月の観察会		トラップ調査			
		主な魚種（種数）	個体数	魚種（種数）	個体数		
					97.11調査	97.12調査	98.1調査
堰の直上	泥底の湛水域	オイカワ・コイ等（4）	5	オイカワ・コイ等（3）	8	13	2
新治小付近	水際の深み	コイ・コイ等（6）	25	なし	0	0	0

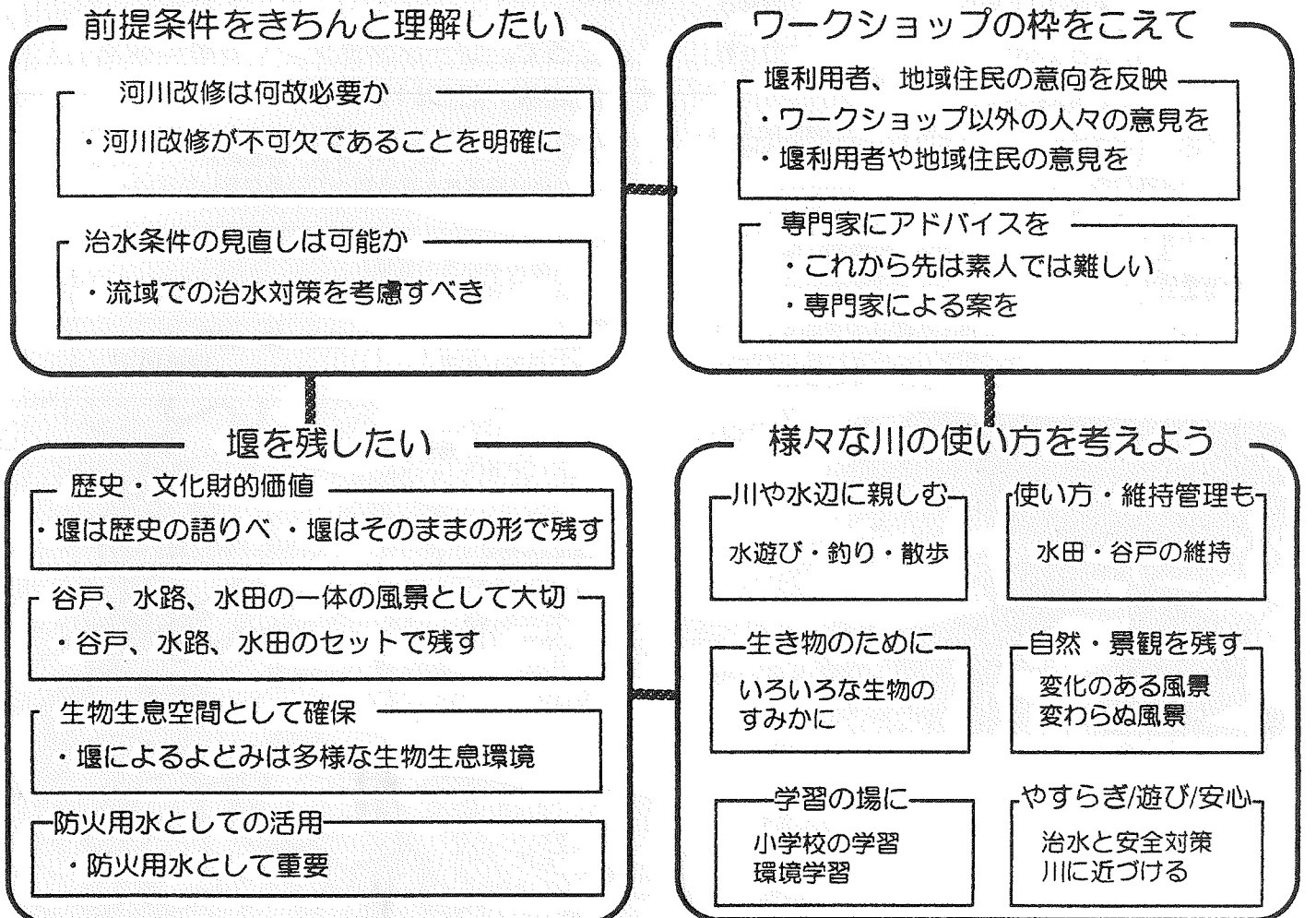
#### ・おわりに

今回は冬の一場面から見たひとつの考察でしたが、杉沢上堰が魚類の生活によく馴染んでいることがうかがわれました。しかし堰周辺における生物の生息状況や利用の仕方は季節によっても大きく変わると考えられます。今後もそれらについてもう少し追いかけていきたいと思っています。

## 基本コンセプトが出ました！

各グループで話し合われた中で、杉沢上堰をどのように考えるかが焦点となりました。対象地区の整備については、前提条件や川の利用など基本的な考え方、意見が多く出され、グループ作業も活発なものとなりました。下図はその内容を4つ

に要約したものです。これらを踏まえて議論を行い、グループ毎に「対象地区のコンセプト」がまとめられ、発表されました。いよいよ次回は現地を調査しながらワイワイガヤガヤとみんなでプランを描きます。



堰は梅田川のへソ

森と川との深いつながり  
自然に親しむ

堰は歴史の語りべ  
～歴史・文化・自然～

愛着でつくる川づくり

コンセプト  
ワード